

2022年12月18日降臨節第4主日

イザヤ書7章10-17節

ローマの信徒への手紙1章1-7節

マタイによる福音書1章18-25節

本日は、降臨節第4主日です。アドベントクランツのろうそくも4本目が灯されました。今年は12月25日が日曜日です。それゆえ、世界中の多くの教会が、12月25日の日曜日にクリスマスをお祝いすると思います。また、24日が土曜日ですから、各家庭でも、土日仕事の方は除いて、ゆっくりとクリスマスイブを過ごされるのかと思います。

ただし、先週も触れましたが、もっとも古い伝統を保持している正教会では、来年の1月7日(土)がクリスマスです。12月25日にクリスマスをお祝いする教会もあるようですが、正式には日時が異なっています。

先週、神学校の授業で、「マタイ福音書にある『聖家族』のエジプト移動は、」という表現をしたら、学生から「聖家族」という言葉の意味は何となく分かりますが、教会では使いません、といわれました。また、「クリスマスには、教会でそれぞれの独自のクリブを並べて、」といいましたら、「教会では、あまりしません」という反応が多かったです。日本という教会の数が少ない地域でも、クリスマスの礼拝の形や迎え方はそれぞれ異なります。先ほど、正教会とわたしたちの教会では、クリスマスを迎える日も異なると申しました。そのように、クリスマスに関することでも、教会によって、様々な面で違いがあります。それは、歴史的・文化的な背景から、仕方がないことともいえます。だからこそ、『聖書』がある。『聖書』から何を学ぶのか、その点で一致を見出すことが大切とも考えられます。しかし、『聖書』をどれぐらい重要視するか、また、『聖書』それ自体のあり方において、どの文書を『聖書』に入れるかどうか、教会によって異なります。そのような中で、わたしたちは今年もクリスマスを迎えます。そのクリスマスに、何を見出すのか、そのことを本日は考えたいと思います。

それを迎える期間の過ごし方も、その日の礼拝のあり方も、またその日にち自体も異なる場合がある、クリスマスですが、クリスマスは楽しくないと感じることはありません(クリスマスの時期に仕事が増えるという人の場合は、そう感じるかもしれません。また、お祝いごとは苦手という人もそう感じるかもしれません)。しかし、多くの人にとって、クリスマスは楽しいものであると思います。現代では、日本でもいろ

いろなところで祝われます。それは、クリスマスに何らかの楽しさを見出す人が多いからだと思います。

それでは、そのような楽しいクリスマスを生み出す要素とは何でしょうか。その答えは数多くあると思うのですが、わたしはその一つに「優しさ」があると思います。なぜならば、クリスマスの出来事、イエス様の誕生には、「優しさ」が関係しているからです。

本日の福音書は、この時期に必ず読まれるともいえる箇所です。「**夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。**」(マタイ 1:19)は、聖霊によってイエス様を身ごもった、婚約者のマリアを前にして、律法的な正しさにとどまろうとするヨセフのことを示しています。「**ひそかに縁を切ろうと決心した**」、このヨセフの決断は、律法を守りながらも、マリアとその胎内の子に、最小限の被害で済むようにと、考えたうえでの判断です。そのような理性的な判断を下したヨセフに対して、夢で天使が、「**ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである**」(マタイ 1:20-21)と告げます。ヨセフが、この言葉に納得したのかわかりませんが、「**ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、妻を迎え入れ**」るのでした(マタイ 1:24)。この淡々とした表現は、ヨセフが、律法に基づいた理性的・合理的な決断を超えて、マリアを妻として迎える決心をしたことを示しています。何がヨセフにそのような決心へと促したのか、その答えもいろいろだと思います。しかし、わたしは、ヨセフが、律法を守ることを前提とした「判断」から、それを超えた、マリアとその胎内の子を守るまことに「優しさ」を発見したからだと思います。

福音書の語り手は、ヨセフのそのような決心について、「**主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった**」(マタイ 1:22)と淡々と説明します。そして、その根拠として、「**見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ**」が語られます。その言葉が実現するためであったと告げるのです。もちろん、これはヨセフが、この言葉を知っていて、律法ではなく、預言の言葉を通して判断したということではありません。ヨセフの決断は、預言の言葉と照らし合わせれば、この言葉に他ならないということです。

この言葉は、本日の旧約日課、「イザヤ書」7章14節からの引用です。ただし、この「インマヌエル」という言葉で元来象徴される事柄は、あまり「優しさ」を感じる内容ではありません。イスラエル・ユダヤ王国が、

大国の戦争に巻き込まれる出来事に関わる言葉、王国が滅ぶかどうかという、緊迫した状況に関わる言葉であるからです。実際、アハズ王は、「インマヌエル」で象徴されるイザヤの預言通りに歩まなかったので、「イザヤ書」8章8節では、「(アッシリアの勢力が) **インマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす**」と、「インマヌエル」という言葉は、ユダ王国がアッシリアに蹂躪されることのしるしとなっています。

そのような歴史的な悲しい出来事を通して、「インマヌエル」という言葉は、救いに関する意味を保持しながらも、その実現を未来に置くしるしの言葉となりました。しかし、わたしたち、教会では、イエス様の誕生を通して、この「インマヌエル」という言葉は、この世界にまことの平和と救いがおとずれる確信を示す言葉となりました。それは、イエス様の誕生にかかわる、重要な要素である「優しさ」が、この言葉の意味を明らかにしたからです。

本日の福音書が示す通り、律法に忠実であり、理性的であり、おそらく人間的にも誠実であるヨセフは、最初、優しいからこそ、「縁を切る」ことでマリアと胎内の子を救おうと考えました。しかし、夢で天使が告げた言葉は、本当の「優しさ」がなんであるかを、ヨセフに発見させたのです。そして、ヨセフは、主なる神様を信頼して、主なる神様がともにいてくださること(インマヌエル)を信じて、マリアを迎え入れることを決断したのでした。その決断は、ヨセフにとっては、大きな決断であったと思いますが、「インマヌエル」という言葉が元来象徴していたような、王国が滅ぶかどうかというような出来事と比較すれば(イスラエル・ユダ自体は小国ですが)、小さな出来事にすぎません。しかし、そのヨセフの小さな発見と決断、そこにある「優しさ」が、世界を変える一歩となったのでした。

今年も、わたしたちはクリスマスを、今年ならではの方法で祝います。本日は、午後、「ぶどうの木」のページェントが、実際に集まって行われます。24日、25日の礼拝も、聖歌とチャントを用いて行いますので、昨年よりは少し豊かな祝い方となると思います。その中で、何を感じるかはそれぞれですが、クリスマスが示す「優しさ」を、改めて心に刻みたいと思います。その「優しさ」があるからこそ、世界にどれだけ苦しみや悲しみがあつたとしても、それを超える慰めと励ましがある、そのことを、今年も確信したいと思います。